

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではありません

コンクールの目的の一つとして、若いピアニストのみなさんにとって教育的な側面がなければならないという事務局の考えに強く賛同します。もちろん、若いピアニストのみなさんの演奏を直接聞くことができない状況において、十分に責任をもって自分の印象やアドバイスをお伝えすることは非常に難しく、ほとんど不可能に近いことです。ですから、今回はショパン in ASIA の全ての部門において当てはまるであろう一般的な事柄について私の考えを述べさせて頂きたいと思います。

今回審査をする中で、芸術的な個性が足りていない、あるいはまったく感じられないという印象を受けた演奏がいくつかありました。一方で、全ての音を正確に弾くことや、先生に言われたことを忠実に守ることに注力しすぎて感じる演奏もありました。残念ながら、自由に柔軟性があり、想像力に溢れる演奏はそれほど多くはありませんでした。正確ではあるものの、楽譜に書かれていることが機械的に再現されているだけだったり、律動的でメトロノームのようなテンポの演奏もありました。このような弾き方や音楽の理解の仕方では、若いピアニストの芸術的な個性、そして音楽的な想像力や音楽に対する深い理解力を伸ばすことができません。

日々の練習の仕方を見直してみましょ。メトロノームは重要な指針です（ですが、あくまでも指針にすぎないのです）。しかし、もしコンサートやレコーディングで、語るようなフレーズの代わりに、メトロノームの音が感じられたり聞こえてきたとしたら、それは完全な間違いです！楽譜に書かれている全ての音、休符、アクセントが聞こえてきたとしても、それらが曲を語るうえでどのような役割を担っているのかが理解されていないのです。そのような機械的な演奏は、特にショパンの作品のように深く語り掛けるような解釈が求められる作品にはそぐいません。

若いピアニストと一言で言っても、年代によってそれぞれの抱える問題は根本的に違うということはもちろん理解しています。しかし、技量のレベルが違うということはさておき、年代に関わらず、自然で創造的で自由な表現や、音楽を楽しんでいる姿が聴こえたり見えたりするとよいと思うのです！特に「自然な表現」ということを強調しておきたいと思います。人工的に外から得たものや、時に音楽の内容への理解の程度を示唆するようなわざとらしく大げさな身振り手振りや動きに基づくものであってはなりません。

もう一つよくある問題として、いわゆる「音楽を表現すること」と「情熱的な演奏」の違いをきちんと理解することが挙げられます。残念ながら、表現というものは速いテンポや強弱に密接に関係していると考えているように思われる若いピアニストの解釈にしばしば出会います！私の意見では、これは最も根本的な音楽における間違いや解釈上の誤解の1つです。音楽的な表現はテンポや強弱によって生み出されるものでなく、演奏者の精神、深い想像力、芸術的な個性から生み出されなければなりません。つまり、テンポや強弱の解釈というのは、単に必然的な想像力の結果でしかありません。

最後に、芸術的な想像力や、それを聴衆に伝えられる能力も大切です。ピアノ演奏におけるこれらの課題を理解するというのが、「よいピアニスト」と「想像力に溢れる素晴らしい芸術家」との違いを生み出します。若いピアニストのみなさんが、そのような音楽の理解や解釈上の問題を探し求め、それらに取り組みられるようお祈り申し上げます！

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではありません

自由に弾くことを恐れず、自分らしい解釈を表現してください。ショパンのルバートや即興的なスタイルを感じることはとても難しいのですが、とても重要です。ロマン派的な高揚感や個人的で親密な雰囲気にも満たない詩的な表現を探してみましょ。力任せに弾いたり、重い音というのは、ショパンの音楽には似合いません。技巧的な部分は、輝かしいテクニックが必要ですが、また同時に音楽的な内容や柔軟性も持ち合わせていなければなりません。強弱の変化をしっかりと計画し、ニュアンスをつけて柔軟に弾き分けましょ。また大きな規模の作品を

弾くときには、全体の形式や感情の移り変わり[感情がどのように進展していくか]にも意識を向けましょう。

いくつかの例外はあったものの、この部門のレベルは並だったと思いました。みなさん芸術面、技術面ともに、まだまだ改善できる点があるように感じました。

具体的には、アゴーギグ、特に激しすぎるルバートが気になりました。また、強弱、アーティキュレーション、リズムの音価、フレージング、ペダル、メロディーと伴奏のバランスなどが好き勝手に弾かれているように感じました。

ショパンの音楽は、崇高で厳かですが、同時に自然なナレーション（語り口）とシンプルな表現を要します。過度のルバートや頻繁なテンポの変化は、語り口を唐突にし、断片的にしてしまいます。旋律に比べて左手が重くなり過ぎないように、旋律と伴奏のバランスにも気を付けてください。フレージングに関しては、スラーの最後にアクセントが付かないように、また過度に激しく長いペダルにも気を付けましょう。

ショパンのコンチェルトは2曲共に最後まで完奏することが、いかに大変だったことかと思いました。1楽章毎に録画されたと思いますが、やはり何人かは破綻をきたしたりテンポが慌ててしまった等がみうけられ残念でした。

コンチェルト部門に共通して言えることは、このコロナ禍にあって、2台のピアノで練習することも、録音をすることも大変なことだったと思います。どの参加者も素晴らしい環境を確保し、年末年始の時期にもかかわらず、最善を尽くされたことが、演奏からも動画からも伝わり、感動しました。今回はアジア大会も2台ピアノでの演奏だったので、少しテンポの変化や歌い回しに不自然さを感じたことが気になりました。室内楽やオーケストラとの共演だった場合は、もう少しわかりやすい音楽表現が必要になるかと思います。また、IからABまでの部門では、どうしてもセカンドピアノの力量で演奏の印象が変わるので、ソリストに集中して審査するのが難しかったです。

本来であれば、全楽章通して演奏するC部門。全員が各楽章ごとの撮影をされていたので、全楽章を弾ききる気合いのようなものが感じられなかったのが少々残念でした。どの演奏もとても魅力的で、よく弾かれていて、さすがにI部門からB部門までの参加者が憧れる部門だな、と思いました。

大きな課題としては、ルバートだと思います。歌わせる時の喋るようななめらかさもあるとよいかと思いました。それらと関連することとして、ペダリングの細やかな表現も工夫されるとよいと思いました。絶妙な和音の色合いも、ペダリングから生まれるからです。

- ・全楽章通しての構成力が大切です。特に第3楽章の内容をもっと深めて欲しいと思いました。
- ・左手の存在をさらに意識しましょう。
- ・特に緩徐楽章で、タッチと音色の種類を増やすように研究しましょう。